

2024年2月7日

ご関係者各位

株式会社おきなわアセットブリッジ

代表取締役社長 大神田 睦

おきなわアセットブリッジによる酒造所と酒類販売会社の M&Aを活用した事業承継支援について

株式会社おきなわアセットブリッジ（本社：沖縄県那覇市、代表取締役社長：大神田 睦）は、沖縄で唯一、日本酒を製造する泰石酒造（うるま市：安田 泰治代表）を被承継会社とする、酒類販売業を主業とする南島酒販（西原町：大岩 健太郎社長）と泡盛メーカーの請福酒造（石垣市：漢那憲隆社長）の二社とのM&Aによる事業承継を支援いたしました。

泰石酒造は、現社長の父である繁史氏が、戦後間もない1952年に地元の有志8名と創業した伝統のある酒造会社で、1966年から日本酒の製造を開始し、現在では県内唯一の日本酒メーカーとしてその地位を確立しています。建物や事業設備の老朽化が激しく、事業の継続には多額の投資が必要となる上、後継者も不在であったことから、当社設立前の令和2年にグループ会社の(株)沖縄債権回収サービスにご相談を頂きました。

承継の打診先として挙げた南島酒販は、県内外に広く販路を持ち、オリジナルブランドの泡盛「shimmer」を立ち上げるなど、業界を盛り上げるため挑戦的に取り組む勢いのある会社です。社長の大岩氏は、「沖縄唯一で日本最南端の日本酒造という存在を残す」という社会的意義に強く共感頂き、利害関係者との長期間に渡る調整に、辛抱強くご理解、ご協力くださいました。

今回の事業承継にあたり、南島酒販は石垣市の請福酒造とタッグを組み、石垣の米を使った日本酒造りで「真の地酒」を目指すこと、酒粕を肥料として再利用するといった新しいアイデアを提案されました。

最終的に安田代表は、「先代から守ってきた蔵を守りたい」という気持ちと、「これからの時代に合った酒造りである」とのご判断をされ、今回の事業承継に至りました。

おきなわC&Cグループでは、今後も沖縄県経済の発展のため、県内の企業、事業者様の様々なお悩みに対して、M&A事業承継支援を初め、債権管理回収コンサルティングや不動産コンサルティング、投資バイアウト事業など、様々なソリューションをご提供させていただきます。

以上

■ M&A 事業承継に関するご相談は
株式会社おきなわアセットブリッジ
営業部／眞榮田
TEL 098-962-4946

■ 本プレスリリースにかかるお問い合わせは
株式会社おきなわC&Cホールディングス
総合企画部／仲里
TEL 098-969-5888

県唯一の日本酒継ぐ

泰石酒造 ▼ 南島酒販と請福酒造

酒類卸の南島酒販（西原町）と泡盛メーカーの請福酒造（石垣市）が、県内で唯一、日本酒の製造を許可されている泰石酒造（うるま市）から事業承継し、石垣島で新たに日本酒造りを始めることが5日までに分かった。日本最南端の日本酒メーカーが沖縄の「米どころ」で再出発し、産地の特徴を生かした「テロワール」（気候や風土）を感じる酒造りを目指す。（政経部・大城大輔）

19面に関連



事業承継する泰石酒造の安田泰治代表（左から2人目）と、譲り受ける南島酒販の大岩健太郎社長（左端）、請福酒造の漢那憲隆社長（左から3人目）。右端は仲介したおきなわアセットブリッジの眞榮田圭氏＝1月30日、西原町・南島酒販



瓶詰めされた日本酒「黎明」1日、うるま市平良川・泰石酒造

1952年創業の泰石酒造は、建物や設備が老朽化し、事業を続けるには億単位の資金が必要になる。安田泰治代表が自社だけでは継続は難しいと判断し、事業承継を決断した。安田代表は「最南端の日本酒蔵としてプライド

石垣で産地米使い製造

を持って守ってきた。ぜひ残して欲しい」と強調した。

譲り受ける南島酒販と請福酒造は、請福酒造の敷地内に新たに日本酒の酒蔵を建設。2026年の夏ごろまでには製造、販売を始める計画だ。

これまで、原料の米は九州から取り寄せていたが、将来的には石垣産米100%の日本酒を目指す。請福酒造も米作りに取り組みたい考え。

南島酒販の大岩健太郎社長は「年間2億〜3億円の売り上げを目指す。石垣産米で、高付加価値の清酒を造りたい」と意欲。請福酒造の漢那憲隆社長は「石垣はおいしい米と水がそろっており、テロワールを生かしたい」と力を込めた。

泰石酒造は3月いっぱいまで休業し、移転の準備を進める。石垣でも「泰石酒造」の名称はそのままに、南島酒販と請福酒造が共同経営する。社長は漢那氏、副社長は大岩氏が就く見通し。両氏が代表権を持ち、安田氏は顧問となる。

事業承継はおきなわアセットブリッジ（那覇市）が仲介した。

沖縄タイムス（1面）令和6年2月6日(火)

存続の危機 事業承継で光

沖縄で唯一、日本酒を造る泰石酒造（うるま市）は存続も危ぶまれたが、事業承継で「日本最南端の日本酒」を守ることになった。新天地はうるま市からさらに南西へ約430キロの石垣島。南島酒販（西原町）と清酒製造（石垣市）に事業を託す安田泰治代表は「沖縄の米をこうで真の地酒になる」と期待する。先代からの技術と思い、「黎明」の銘柄を託した今回の事例からは、事業承継の重要性が改めて浮かび上がった。

（政経部・大城大輔）

泰石酒造「黎明」託す

泰石酒造は、泰治氏の父の繁治氏が戦後間もない1952年に創業。地元産米を興そうと、周辺地域の有志8人も出資した。繰り返し蒸留することで純度が高くなる「連続式蒸留焼酎」は、泡盛と違い臭みがなく米量にも受けた。社員が60人に及ぶ（地域

の復興を支えた。日本酒を造り始めたのは66年。温暖な沖縄には向かなかったが、長崎県の「黎明酒造（現・杵の川）」との技術提携で、季節を問わず醸造できる技術や設備を導入した。日本酒「黎明」は、沖縄の日本酒シェア70%を誇った。

県内シェア喪失

だが、72年に沖縄が日本に復帰すると、県外メーカとの競合でシェアを喪失。息子も県外で他の仕事に就いており、4年前に事業承継を仲介する沖縄債権回収サービス（那覇市）に相談した。だが、「先代から守ってきた蔵。何度も自分で再建できないか考え直しては、現実をみて不安になるといつ繰り返した」と葛藤が続いた。

今回は承継先を打診された南島酒販の大岩健太郎社長が清酒造とタッグを組み、石垣の米を使った日本酒造りを提案。酒かすは肥料にするなど再利用する考えもあり、泰治氏は「これからの時代に合っている」と承継を決断した。大岩社長は今回の承継の意義は、沖縄唯一で日本最南端の日本酒蔵という存在を残すこ

とに尽きる」と強調する。全国に地元の酒

3者は「日本酒には可能性がある」と首肯を交わす。「黎明」を飲食店などに卸していた南島酒販の大岩社長によると、需要に供給量が追いついていなかったという。

泰治氏は「沖縄にあることで47都道府県全てに、地元の日本酒がある。日本酒ファンや観光客は、その土地の酒を飲みたいと絶対に手に取ってくれる」と話す。「先代や私の思いを受け継ぎ、発展してほしい」と力を込めた。

全国的な課題で、雇用や技術への影響が懸念されている。帝国データバンクの調査によると、沖縄の後継者不在率は下位から5番目（23年）だ。沖縄債権回収サービスのグループ会社で、事業承継を仲介したおきなわアセットブリッジの眞桑由佳氏は「会社や従業員、取引先、自身を守る一つの手段が第三者承継。一つの選択肢として認知されつつある。必要であれば、専門家に相談してほしい」と話した。



事業承継する泰石酒造の安田泰治代表。酒蔵には現在の工場では最後の生産となる日本酒「黎明」が瓶詰めされていた＝1日、うるま市平良川



1967年2月6日の沖縄タイムスに掲載された日本酒「黎明」の新聞広告。泰石酒造の安田泰治代表のあいさつには「理想以上の好評を博しまして」の言葉が切れた。